

フォルクローレ

花が
小さな花が散らばっていた
風は
まどろんでいた

聞こえるのです
微風の囁きの中に
花々の口ずさむ歌の中に
人々のフォルクローレの中に

浮かんでは消える
かすかな愛
たなびく哀しみ
そしてぼんやりとこみ上げるもの

言葉がにじみ出ようとしている
生まれようとしている
音楽として
慄えとして

僕は
待ち続けた
誕生の時を
最初の息吹を

目をそむけたくなるような
黒ずんだ醜さと
野蛮なダミ声とを持って
それは生まれた

ところが、彼の最初の一步は
やがて小さな行進となり
森の中を抜けた時には
生きとし生ける者達を引き連れていた

僕には不可解だった
彼がフォルクローレを歌う姿が

そして
全ての感情を引き寄せる魔力を

いやらしい哄笑と
破廉恥極まりない仕草
そして、それに呼応するのは
ああ、これは生命ではないか

その手が茎に触れると
花は愉悦に慄え
その歌がこだますると
動物達は欲望に身体をうずかせた

こいつを生み出したのは僕じゃない
大気なのだ
愛が浮遊する大気
哀しみが浮遊する大気なのだ

僕は叫ぼうとしていた
ありったけの毒を盛って

「去れ、^{ミューズ}詩神よ！」

(・・・)

花が
小さな花が散らばっていた
風は
まどろんでいた

聞こえるのです
微風の囁きの中に
花々の口ずさむ歌の中に
人々のフォルクローレの中に

「もう一度、
もう一度生まれてきてはくれまいか・・・」と

(1994.1.15)